

草木も資源としてリサイクル

シリーズ「ごみ減量をいかにして成功させるか」④

草木はたい肥として活用されたり、「木材バイオマス」として発電の燃料としてリサイクルすることができます。庭の掃除で出た草木は燃やすしかないごみとして出さず、柳川リサイクルセンターへ直接搬入をお願いします。

【問】市生活環境課リサイクル推進係 (☎ 88・8933)

草木の搬入料金は10kgで200円

- 搬入先 柳川リサイクルセンター（三橋町久末130-3、☎ 73・8325）
- 受付日時 ▷月～金曜＝午前8時30分～午後4時▷土曜＝午前8時30分～午後3時
- 料金 10kg当たり200円
※有明ひまわりセンターと同額です。
- 搬入手順 ①草木を車にのせそのまま重さを量る②草木を所定の場所に下ろす③再度重さを量り、最初に量った重量差を草木の量として10kg当たり200円分を支払う
- 搬入の注意点 ▷木材は長さ50cm以内にして搬入▷泥を取り除き、1日天日干しする▷草木以外のごみは混入しない▷水路清掃などで出た水草や藻は搬入不可▷指定ごみ袋に入れて出す必要なし



リサイクルセンターへ搬入される草木

5月の可燃ごみの量

柳川市 1348トン	みやま市 456トン
---------------	---------------

5月の市内の可燃ごみの量は1348トン（前年同月1273トン）でした。みやま市の可燃ごみの量は456トン（前年同月566トン）でした。

3～5月の可燃ごみの割合

柳川市 74%	みやま市 26%
------------	-------------



雑がみ回収チャレンジ袋を無料配布

市は、家庭から出る雑紙の分別を推進するため、「雑がみ回収チャレンジ袋」を作成。この回収袋は、1人3枚まで市生活環境課や市役所各庁舎1階の窓口、コミュニティセンターでも無料配布中。回収袋を使って、雑紙の分別に挑戦してみませんか。

●「雑がみ回収チャレンジ袋」のおすすめポイント

- ① A4サイズの紙が折らずに入る大きさ
- ② 回収袋の側面には、雑紙の出し方や分別方法などを記載し、雑紙の分別をお手伝い
- ③ 破れにくい強い紙で作成



よくあるお問い合わせ

Q 雑がみ回収チャレンジ袋がなくなったときはどうやって出せばいいですか？

A 雑がみを出すときは、家庭にある紙袋を使用してください。紙袋がないときは、ホームセンターなどで安価に購入できます。また、雑誌類の間に挟んで出すことも可能です。

柳川とっておき歴史の話 - 立花宗茂外伝 - 第11回

【問】市観光課観光推進係 (☎ 77・8563)

浪牢の立花宗茂を支えた十時撰津連貞

関ヶ原の合戦で西軍に与し、所領の柳河を失って浪牢生活に入った立花宗茂には、従う家臣が20数名いました。

このおり、由布雪下（諱は惟信・戸次氏譜代の家老）、矢島石見（諱は重成・もと足利將軍家の家臣）と並んで、宗茂を献身的に支えたのが十時撰津（諱は連貞・戸次氏譜代）です。

供をした家来は、ときに加藤清正の領地へも往来したり、交代した者もいたようです。

ただ、思いのほか上方（現・京阪地域）、それにつづく江戸での滞在が長引いてしまいました。

持参の金子が底をつき、宗茂を養う同行者たちは、他家に仕えている旧臣たちへ無心する一方、竹箒や草履を編んだり、竹箆を削ったり、日雇い仕事に精を出さねばならなりません。

かつて、宗茂が大名だった時代には、千三百石をいただいた立花家の家老十時撰津は、深編笠で

面体を隠し、にわか虚無僧となつて門づけをしていた、との挿話が残っています。

これも時勢、牢々の主君の生活費を稼ぐためでした。

撰津は立花家にあつて、一騎当千の強者の中でも、一、二を争うほどに腕が立ちます。

一方、尺八は彼の趣味でした。これをもって撰津は、托鉢に江戸の街を流したのですが、西部開拓時代に相当する江戸時代初期の首都は、治安が悪く、けんかや刃傷沙汰は連日のこと。

質の悪い牢人（浪人）も、巷にあふれていました。

ある時、こともあろうに十時撰津に因縁をふっかけ、からんで金をせびり取ろうとした物好きな牢人が、3人いたようです。

主人に迷惑がかかっては、と自重した撰津ですが、3人は抜刀して斬りかかってきます。

やむなく一人の刀を奪い、瞬時に3人を討ち果たし、そのため撰

津は町奉行所へ連行される事態となりました。

あまりに鮮やかなその手並みから、もしや、とこれを聞きつけて「徳川四天王」の本多忠勝が撰津から宗茂の居場所を聞き、訪ねてきた、との挿話もあります。

老中・土井大炊頭利勝であったとも。とにかく、徳川幕府に改めて、宗茂が江戸にいるということに印象づけたのです。

のちに宗茂が、柳河へ復帰する



西方寺（柳川市恵美須町）

■文Ⅱ加来耕三

と、撰津は家督を子の三弥（諱は惟昌）に譲りますが、その後も、島原・天草の乱では宗茂に従い、老体ながら戦地に赴いていました。十時撰津がこの世を去ったのは、寛永21（1644）年9月14日のこと。墓は現在、柳川市恵美須町の西方寺に残されています。生年は不詳ながら、享年は89だったと一説に伝わっています。（つづく）